

# 椎名麟三の思索のあと

紅野謙介

本誌第1号、第2号に載せた「椎名麟三講演メモ」は全部で三〇種類に及ぶ。タイトルがつけられているものが五種類、それ以外のメモが二五種類である。講演のための原稿下書き、心覚えにあたる資料類である。なぜ、それが貴重な資料なのか。それには椎名麟三の文壇デビューとその反響の大きさを説明しなければならぬ。

作家としての椎名の活動は、一九三八（昭和一三）年までさかのぼることができる。この年に小説を書き出しているが、まだ習作で活字になるにはいたらなかった。初めて活字にすることができたのは、一九四一（昭和一六）年一月、同人雑誌「新創作」においてである。「新創作」は一九三九（昭和一四）年七月の創刊。

も断られた。筑摩書房では編集長だった白井吉見の即断で掲載が決まった。

この一挙掲載によって新人作家として注目を集め、四ヶ月後には、「重き流れのなかに」を同じ「展望」（一九四七年六月）に発表。「深尾正治の手記」（個性）一九四八年一月）などを出すかたわら、同年同月に『重き流れのなかに』（筑摩書房）と『深尾正治の手記』（銀座出版社）の二冊の創作集をあいっいで刊行した。いかに評価されたかが想像される。その後も悪戦苦闘しながら、六月に長篇小説『永遠なる序章』を河出書房から書き下ろしで出した。

ちなみに三島由紀夫の『仮面の告白』も同じ河出書房の書き下ろし長篇小説シリーズの一冊である。刊行されたのは一九四九（昭和二四）年七月で、『永遠なる序章』の一年後。その直前、大蔵省に勤務していた平岡公威（三島の本名）の文学志望に懸念を抱いた父・平岡梓は、わざわざ鎌倉文庫の編集者であった木村徳三のもとを訪ね、「……あなた方は、公威が若くて、ちよつと文章がうまいものだから、雛妓、半玉を可愛がるような調子でごろんになっているのじゃありませんか。あれで椎名麟三さんのようになれるものですかね。朝日新聞に載るような一人前の小説家になれますか」と聞いたという（『文芸編集者その覚悟』、TBSブリタニカ、一九八二年六月）。まさに高級官僚が息子の行く末を心配し、「一人前」として比較対象にあげるくらい、「椎名麟三」の名前は一般に知られたのである。

初めは「創作」というタイトルだったが、翌年、改題した。同人には寒川光太郎や船山馨、佐々木翠らがいた。しかし、原稿を書いてもなかなか掲載にいたらなかった。同人間でも椎名の小説は評価を得られなかったのである。

それでも船山馨は椎名の文学を買っていた。一九四二（昭和一七）年には椎名の長篇小説の原稿を河出書房に持ち込んだが、時局に合わないということで不採用。そのまま預けられた原稿は戦災で烏有に帰したという。

椎名麟三の名が知られるようになったのは、「展望」（一九四七年二月）に掲載された「深夜の酒宴」からである。これももともとは船山の勧めで、あちこちの出版社に持ち込まれたが、いずれ

新人作家が突然、クローズアップされて、文壇に振りまわされることは文学史をみても決して珍しいことではない。文壇や出版社はつねにそうした新星の登場を待っていた。敗戦直後は、既存の価値観や伝統的な規範がいったんすべて懷疑の目を向けられたときである。政府にも軍隊にも裏切られた人々は、とりわけ信頼すべき言葉と、経験に裏打ちされた確かな思索を待ち望んでいた。椎名麟三はそうした期待を集めた稀有なひとりだった。

では、椎名麟三の小説はどのようなものだったか。実質デビュー作の「深夜の酒宴」を例に見てみよう。舞台は両国の運河沿いで、焼け残った倉庫を改修した貧相なアパートである。その地名を聞けば、東京の下町が二年前の大空襲によってどこまで焼き尽くされたか、多くの読者は共有していたはずである。

刑務所の病棟にいたことがある「僕」には、そのアパートの一室は光も射さない、独房のように感じられる。その眼差しに、希望もなく、疲労と絶望を漂わせたアパートの住人たちが描き出される。隣の部屋に住むのは、窃盗の前科二犯である荷扱夫とその妻と子どもである。彼女は喘息持ちで、夜中、ずっと咳き込んでいる。暴力的な夫を抱え、彼女は昼間はのべつ愚痴と感傷にひたっている。反対側には謄写版原紙の製版を仕事にしている戸田とおぎんの夫婦がいる。戸田は怠け癖があり、「僕」としばしば議論をする。しつかり者のおぎんはアパートの管理人代理と女中役をつとめている。おぎんはつねに戸田に文句を言い続けている。向

いの部屋にいたのは加代という売春婦である。夜な夜な若い男が訪ねて騒がしい。

アパートを所有しているのは「僕」の伯父で、かつて「僕」は伯父のもとで働いていたが、ある件で逮捕されて刑務所に入れられたときにその会社をつぶす羽目に陥った。だから伯父は、ずっと「僕」を「罪人」だといい、「恥を知れ」「首をくくればいい」と罵る。そして加代はその伯父の妾だった女の連れ子の娘だという。この出口のない絶望的なアパートでの日々が描かれ、作中で住民二人が栄養失調や病気で亡くなる。伯父から悪罵をあびせられた「僕」は渡された町内会の紅白の綱を自分の首にまいて絞める真似をする。それを見ていた加代が笑い声をあげる。

こんな一節がある。

いや、これらの人々は僕に深い絶望を与えるのである。僕の心のなかにある或る憧憬を救いようのない絶望に陥れるのだ。だが、それが却って今の僕には快い。僕は自分の絶望を愛しはじめていたのである。勿論その愛は憂鬱だ、だが憂鬱という奴は、夜寝床へ入るときのような楽しさを与えて呉れるのである。

椎名麟三の絶望は決して意匠ではない。警察官の父と、女中をしていた母のあいだの私生児として生まれ、母は自殺未遂を何度か重ね、実際に最後は自殺に成功した。両親の不和のなか、中学を退学して家出し、野宿をしたり、見習いコックや出前持ちなど

の仕事を転々としたりしたこともあった。母の何度目かの自殺未遂を契機に、家にもどり、宇治川電気鉄道（現在の山陽電気鉄道）で車掌となった時期もあった。しかし、このとき労働運動に参加。

日本共産党に入党したが、二〇歳のときに検挙され、さんざん拷問を受け、懲役四年の一审判决を受けた。控訴して未決囚となったが、一九三三（昭和八）年に転向し、懲役三年執行猶予五年の判決を受け、釈放された。それから十年近く、表だって仕事につくことはできず、筆耕のアルバイトをしながら、結婚した妻寿美の経営するおでん屋で生計を立てたという。ニーチェ、ドストエフスキーが文学への導きの糸となった。

イデオロギーも思想も、もちろん自分自身も信じられない。戦後民主主義にも、そして椎名がかつて参加した左翼運動にも絶対的な共感はない。戦争末期に世田谷区松原に移り住んだが、その直後には妻の実家のあった本所区は東京大空襲で焼け野原になった。自分の過去は焼け跡と廃墟ばかりがつづいている。しかし、その一方で、この文章には絶望の虚妄、居心地のよさをねじれたかたちで凝視するまなざしがある。それは絶望をつきぬけたところに、「ほんとうの自由」「ほんとうに生きる」場所への希求につながっている。

椎名麟三は、このち一九五〇（昭和二五）年一二月、日本基督教団上原教会で赤岩栄牧師のもとで洗礼を受け、キリスト教に入信した。ここまで深く絶望し、絶望の認識を深めた作家がな

ぜキリスト教を信じることができたのか。

椎名麟三の肉声を聞きたい。そういう声が押し寄せ、一九五〇年代になると椎名はさまざまなところで講演に呼ばれるようになる。冬樹社の『椎名麟三全集』別巻の「年譜」は、斎藤末広による実に丹念な労作だが、たとえばその一九五二（昭和二七）年の項を見ると、五月に東京大学の五月祭で、六月にはYMCAと國學院大學で、七月には名古屋、横浜YMCAで、八月には箱根、伊豆下田、東電文化会館で、十一月には京都大学、同志社大学、文芸首都の会東京支部例会で、なんと十一回の講演が記録されている。おそらく、それも一部であろう。他の年にはいろいろな大学はもちろん、高校での講演も記載されている。



1952年11月、京都大学での講演時

そうした背景を見ると、椎名麟三の講演メモがこれほど多く残されていた理由も分かる。今号に収録されていた「椎名麟三講演メモ11」を見てほしい。戦時中、文学活動を開始した椎名は、さかんにさまざまな実作者の小説入門を読んだという。木村毅『小説研究十二講』（新潮社、一九三三年）、加藤武雄『小説の作り方』（新潮社、一九三六年）、川端康成『小説の研究』（第一書房、一九三六年）、『小説の構成』（三笠書房、一九四一年）など。そして違和感を抱いた。そこには「朝起きて顔を洗って、朝御飯を食べて、会社へでかけたというようなことを書いてはいけないというようないろんな禁止事項」が出ていた。「私たちの日常生活で、習慣的となっているようなことは書くな」。しかし、ほんとうにそうだろうか。「深夜の酒宴」では、禁止事項を犯して、「わざと、むやみやたらに繰返し」という。日常を生きているということがどれほどたいへんか、人間生活においていかに重要であるかを考えていたからである。

敗戦後の食糧事情を想像してみよう。交通網はもちろん、物流が寸断されたため、食材は都市に流通しなくなっていた。都市生活者にとって食料の調達は必須のことになっていた。政府は配給制によって需給調整をしようとしたが、それは戦地や旧植民地から引き揚げてきたものたちを加え、人口が一時的に増大した日本国内では焼け石に水に過ぎなかった。配給の行列に長時間、並び、



少ない食料を手に入れることが人々に欠くべからざる習慣になっていたのである。徒労になることが多い待ち時間は、蓄積した鬱憤をはらす場にもなる。無駄に待ちつづける女たちの愚痴やため息が、情けない男たちの傷口に塩をぬりこむ。「僕」が洩らす「腹が減つて仕方がないんだ」という言葉はこの小説に描かれた絶望が観念的なものだけでなく、まさに物理的生理的なものでもあることをよく伝えている。

「おいしいお団子ですよ。いかがですか。おいしいお団子ですよ。いかがですか。安いですよ。十円ですよ。いかがですか」と、アパートに暮らす幼い子どもたちが廊下で口々に叫んでいる場面がある。このセリフは三度もくりかえされるのだが、それを聞きつけた売春婦の加代が子どもたちに、客からもらったものなかを渡して、これ売りなさいよと言ったら、瞬く間に、売ることなくすぐ口に入れた。加代は「僕」の部屋に入ってきて、笑いこころげながら、「食べているの！これ売りなさいと少し上げたら、売らないで食べているの！」と言う。

闇市の売り子を真似した子どもたちのふるまいは、彼らの飢えを物語っている。十四歳の少年は栄養失調で亡くなった。日常の習慣とは、それを成り立たせる社会的な諸条件があつて初めて維持される。しかし、そのあまりに深刻な飢えがときとして笑いをもたらす。残酷かつ痛ましい笑いである。そしてそうした小説の表現を通して、既存の小説概念に「シヨック」を与えようとした

のである。

人気作家となった椎名麟三は、盟友船山馨と、一九四八年五月に「次元」という雑誌を創刊している。わずか五号で終わってしまった雑誌だが、「われわれの時代に対する真剣さに於て、無名の人々の発言を発掘し、雑誌に発表することによって、一つの社会的存在までに高めたい」という目的を掲げた。実際に、創刊号には荒本守也の「アンティ・クリストの誕生」、第二号には安部公房「異端者の告発」、第四号には福田恆存の長篇戯曲「最後の切札」が掲載された。安部はまだ新人で、福田は批評家としてのみ知られていたが、劇作家としての本領はまだ発揮していなかった（「キティ颱風」が発表されるのは一九五〇年一月）。荒本にいたつてはこの長篇評論を脱稿したあと、腸閉塞であつけない死をとげ、椎名を悲しませた。戦後派文学は、花田清輝のいた真善美社の「綜合文化」や、河出書房の「序曲」など、新しい文学表現につねに門戸を開こうとしたが、「次元」もそこにつらなっていたのである。

椎名の講演活動はこうした小さな運動ともつながっている。講演メモを読んでいくと、いかに椎名が真正面から大きな課題に取り組んでいることがわかる。「この世のなかには、ほんとうの自由も、ほんとうの救いもない」、自分は小説でそう書いている。とすれば、「この世のなかには、生きて行く意味がない。生きて行く意味がないならば、だから当然小説を書くという意味もない」

ことになる。最終的には、自分の書いた小説から「何故死んでしまわないのか、という問いが跳ねかえつて来る」という。

先にふれたように、椎名の母は自殺未遂をくり返し、実際に自殺して亡くなった。生と死の境界線を行き来して、向こう側に落ちやすい人だったのだろう。不実な父を抱えながら、椎名はこの母に育てられ、成長した。左翼運動による逮捕と獄中生活をへて、転向後はみずからも自死の誘惑にかられた。戦争により死はいたるところに存在し、数々の黒焦げの遺体となって目の前にも現れた。おそらく、大なり小なり、戦争をくぐりぬけた人々には、この世に生きて行く意味はあるのか、なぜ死なないのかという問いが冷たい刃のように刺さっていた。講演メモはそうした問いに向き合いながら椎名麟三が重ねた思索の足あとを残している。

もちろん、問いに対する正解はない。椎名は最終的にキリスト

を信じた。椎名はイエスの「復活」がみずからの回心をもたらしたと語っている。イエスの「復活」とは何か。それは講演のなかで何度か説明しているが、それでも分かりにくい。この世の不条理、不合理を見尽くしたなかでイエスは処刑された。すべては無意味だ。しかし、絶望の奥底で、イエスは三日後に甦る。その甦りにおいて、すべての言葉、すべての感情、すべての行為が意味を取り戻す。これを欺瞞だと言う人もいるかもしれない。正否はべつとして、こうした思索家の言葉はやはりわたしたちの心をとらえる。わたしたち自身をさらなる問いに導くからである。ウクライナやガザの惨状が報道されるたび、わたしたちは同じ問いの前に立たされる。椎名麟三がしばしば使った「堪える」という言葉が身近に感じられるのはそんなときである。

（日本近代文学研究者）

# 「石川淳日記」一九五二年～五四年分について

山口俊雄

昨年度末、世田谷文学館所蔵「石川淳日記」の一九五〇年・五一  
年分が翻刻・公開されたのに引き続き、今回、残りの一九五二年  
～五四年分も翻刻・公開される。

作家という個人事業主としての営業活動に関わる必要不可欠な  
記録、備忘録としての性格は基本的に変わっていない。ただ、こ  
の期間の特に後半、転居や離婚といった私生活上の大きな転換が  
生じていることもあってか、一九五三年十二月あたりから記載が  
間遠になり、記録としての網羅性は残念ながら減退してゆくこと  
になる。

以下、拙稿では、(一) 洋書から古典籍にわたる書籍の購入状況、  
(二) 執筆活動、(三) 他作家らとの交流、という大きく三つの面  
に着目して、「石川淳日記」一九五二年～五四年分の特徴をスケッ  
チしてみよう(引用文中の「」内は、山口による補いである)。

## (一) 書籍の購入

二月二十二日 サルトル(二冊)

三月二十八日 ヴアレリー、リュシアン・ローラ

四月八日 ガブリエル・マルセル、カミュ、ヴァレリー、ルネ・クレール

四月二十八日 クロード・アヴリーヌ

五月二十七日 《フランス書七冊》タイトル等不記載

七月十五日 ヴアレリー、アルマン・ホーグ

八月十三日 フランソワ・モーリアック、ヴァレリー

九月二十八日 モーリアック、サルトル

十月十日 マルタン・デュ・ガール、ヴァレリー

十一月十七日 ピエール・ド・ボワデフル、ヘンリー・ミラー

十二月二十二日 エチャンブル、マックス・ブロート

一九五三年一月二十六日 アンジェロス、「新フランス評論」

アランへのオマージュ号

三月十四日 ヴアレリー、ジャン・スレロール、ミシェル・

カルージュ、リルケ、ジッド、詩のアンソロジー(一冊)

四月十一日 クローデル、ジャム、リルケ

五月二十日 ヘンリー・ミラー、アルベール・ラザール、モー

リス・ベメル

七月二日 モーリス・ベメル(注文書)、『プチ・ラルース』

八月二十三日 サルトル

九月二十八日 クロード・モーリアック

(購入場所不明 一九五三年後半頃 ルネ・ラング、ジャン・ジュネ)

## 洋書

前号に、《作家である以上、書くために読まなければならない。  
とりわけ石川淳のようにブッキッシュな作家の場合、なおさらで  
ある》と書いたが、今回翻刻分にも多数記載されている。すべて  
フランス語文献である。

購入書店、日付、著者名を網羅的にリストアップしておこう。

## 丸善

一九五二年一月二十八日 コクトー

八月五日 「新フランス評論 (La Nouvelle Revue Française)」

ジッド記念号

一九五三年一月十九日 ジッド、マルタン・デュ・ガール

紀伊國屋書店

一九五二年二月三日 ミシヨ、ヴェルコール、マルセル・

アラン、ジャン・デュトール

前号の時期もそうだったが、やはり丸善よりも紀伊國屋書店か  
ら購入することが圧倒的に多かったことが分かる。

読後感の記載は少ないが、例えば、一九五二年三月五日、  
《Aragon : L'homme communiste》を読む、大丈夫はよろしく働  
哭してこれを読むべし 西欧の雄弁とはけだしかくのごときスタ  
イルをいふならむ》とあり、読了したアラゴン『共産主義的人  
間』(一九四六)について、この日記の中では異例にも見えるか  
なり感情的な文言が記されている。紀伊國屋書店で購入したのは  
一九五一年九月八日のことだったが、読了後直ちに四日後の同月  
九日欄筆のエッセイ「歌う明日のために」で主題的に取り上げら  
れることになる。

三月五日(水) Aragon : L'homme communiste を読  
む。大丈夫はよろしく働哭してこれを読むべし 西欧の雄弁  
とはけだしかくのごときスタイルをいふならむ。この日は量  
なみたる雪、エッセイの名を認す

同年十月三十一日、『夜 Roger Martin du Gard : Notes sur André  
Gide』読了。ジイドとロシニスムについて記したところお  
もしろし(100p)ジイドはおそらく高齢にはいさゝかの盲目的行動  
ありてもさして配慮すべきにあらずと考へたるものゝ如しとあ  
る。同年一九五一年二月十九日に物故したジッドについて、「ジイ  
ドむかしばなし」(「文学界」一九五一・四)を書いた石川だが、関  
心を持ち続け、ジッド没後に刊行されたばかりの新刊書にも目を

通し、興味を引かれた点を記している。

この書籍が広く読まれるべきと感じたのか、福永武彦に邦訳を勧めたことが日記の記述から分かる。

一九五三年一月一日、《福永武彦にはがきを遣る、出版についての用談あればなり》。同月十二日、《福永武彦に書を裁して遣る、翻訳出版についての件なり》。同月二十六日、《福永武彦来話。〔略〕文春クラブにて福永を鷺尾洋三に紹介す 翻訳の件也》。五月二十八日、《加藤周一福永武彦より来信、加藤は南仏カテドラルの美を論じ福永はローデエマルタンデュガールの小著の翻訳成れるを告ぐ》。石川は文藝春秋新社の鷺尾洋三に福永を紹介、一九五三年九月、文藝春秋新社から、ロジェ・マルタン・デュ・ガール(著)、福永武彦訳)『アンドレ・ジイド：1913-1951』が刊行された。

読後感是他に、一九五二年三月二日(サルトル著書、同年六月十日(アラン著書)に記されている。

他に取り上げておきたいのが、一九五三年一月十八日、《夜旧訳法王庁の抜穴を一関す岩波文庫より再刊のむねをいひおこせたれば也》。翌十九日、《午後日本ばし丸善におもむきつ Andre Gide : Les Caves du Vatican [略] を購ふ Cavesは文庫本増刷について参考とするため也》とあることである。増刷に際して象嵌訂正を視野に入れた再読であろうが、他の訳書の再刊——例えば、アナートル・フランス『赤い百合』(三笠書房「三笠文庫」、一九五三・六)——についてはこのような記述が見当たらず、ジッド「法王庁の

抜穴」への石川の思い入れが窺われる。同年四月一日、《岩波書店より文庫本法王庁の抜穴十部送り来る、十余年ぶりにての増刷也》と言及がある。

## 和書

次に、古典籍の購入である。古書店ごとに購入日を網羅的に拾うと次のようになる。

文行堂(上野) 一九五三年二月五日  
山本書店(神田) 一九五三年二月十六日、三月三十一日、六月十七日、七月十日(購入書の到着)  
村口書房(神田) 一九五二年四月二日\*、六月十七日、十月一日\*、十一月十一日、十二月一日、二十四日、一九五三年三月六日、五月二日、十月二十二日\*  
一誠堂書店(神田) 一九五三年三月八日  
竹苞書楼(京都) 一九五三年十月十四日  
店舗不詳(本郷通り沿いの古本屋) 一九五三年六月五日

村口書房の\*を付した日付は、石川が強く関心を示していた蜀山大田南畝に関わる書籍等の購入日である。

他にも、一九五二年三月三十日、《神田古書会館に琳琅閣古書売立の下見におもむく、ほとんど見るべきもの無し》といった記述

もあり、熱心に古典籍漁りをしていたことが分かる。

読後感も拾っておこう。

一九五二年十一月二日、《南畝手写本長祿記応永記を読む 金閣銀閣建立の世に私闘の殺戮絶えず 政争のごときものか その規模の小なること生活の貧困を語るに似たり》とある。これら「応永記」「長祿記」といった南畝手写本の軍記物はのちの「修羅」(一九五八)のヒントの一つになったと思われるが、その時代の政治に見られる《生活の貧困》を逆に乱世の面白さを語る小説へと転じた石川の着想が興味深い。

一九五二年十二月五日、《夜南郭先生燈下書を読む、作詩作文の法を論じてところぐ聴くべきの言あり、僻韻險句を忌むべしといへるは詩にあつてはまさに然らむ 散文にては必ずしも深く忌むべからざるにや》。ここに挙がる「南郭先生燈下書」はこの当時既に近代の活字本の翻刻があり、石川の購入日も確認できず、石川の接した書物形態は不明であるが、韻文に対する散文の自由への言及が興味深い。

## (二) 執筆活動

次に、石川淳の執筆活動に関わる記述から注目し値する点をいくつか拾い出してみよう。

一九五二年四月七日、《夜来小説他人の自由の稟をついで暁に

成る、五十七枚、別冊文藝春秋に寄せむがためなり、ことし小説を草したるはこれを以てはじめとす》とある(傍線、山口。以下同じ)。その一つ前に書かれた小説「春の葬式」(別冊文藝春秋一九五一・一二・二五)は一九五一年二月十日擱筆であり、「他人の自由」(別冊文藝春秋一九五二・四・二五)擱筆までおよそ四ヶ月近くが経っている。そして「他人の自由」の次に書かれる小説「乞食王子」(文藝一九五二・八)の擱筆が六月十六日、その次の小説「アルプスの少女」(文藝同・一一)の擱筆が九月二十四日、あと年内に書かれた小説はもう一作「蜘蛛」(別冊文藝春秋一九五二・一〇・二五)のみであり、その擱筆が十月十四日となる。

従って、一九五二年に書かれた小説は、計四作にとどまる。なぜこれほどまでに小説執筆が減ったのか。それは、エッセイ執筆に力を入れたからである。ひと口にエッセイと言っても三種類を数えることができる。

まず、「首尾」(「群像」一九五二・三)、「歌仙」(「群像」一九五二・六、七)という連句を盛り込んだエッセイ。次に、前年から続いている「文学界」八月号まで毎月掲載され、のちに『夷齋俚言』(文藝春秋新社、一九五二・一〇)にまとめられるエッセイ群、さらにもう一タイプ、「文学界」九月号から翌年八月号まで毎月連載される《夷齋清言》というエッセイ群がある。

「首尾」「歌仙」は、自作の連句を提示しつつ、句作の経緯や句意の説明を加えたものである。独吟の連句を詠むところから始め



て、それなりに手間が掛かるであろうことは容易に想像が付くし、日記の文言からもある程度大変さを窺うことができる。

あとの二つの連載エッセイであるが、《夷齋俚言》がもっぱら時事・政治を扱う一方、《夷齋清言》は文芸・文化・文事を扱い、主題的には大きく異なるのだが、いずれも必ず具体的な書物（洋書・古典籍）を紹介しながら論じるという点は共通しており、すなわち、これらのエッセイを書くために、書物を入手（洋書・古典籍）し、読み、そして自分の考察をまとめるという過程を踏まねばならず、それなりの時間とエネルギーを要することは見やすい。

このように手間暇のかかるエッセイに石川が傾注していた以上、小説の執筆が減るのはやむを得まいが、数少ない小説四作の内、児童文学翻案（パロディ）ものが二作を占める点を考慮すれば、ここに浮かび上がってくるのは、小説に消極的になっていくというよりも、小説では現代小説だけでなく翻案ものにも、エッセイでは、連句に時事エッセイに、そしてそれとは一八〇度方向転換したような文事に関わるエッセイに、とさまざまな試みにチャレンジする石川淳の姿である。

一九五二年六月二十五日、《菅原国隆「新潮社」来話、原稟依頼されたれども確約せず、夜文学界に寄せるためにエセエ革命とは何か二十八枚脱稟、エセエの政治談にわたるものはこれにて打切とし来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり》とある。傍線部のチャレンジ宣言の爽快さは言うまでもないが、新

潮社からの原稿依頼に確約を与えないところから、いま一番やりたいことに傾注したいという姿勢が窺われて興味深い。（このあと、「鳴神」（「新潮」一九五四・三）まで石川は新潮社の雑誌に全く書かない。）

の六月二十七日（水）菅原国隆来話。原稟依頼されたれども確約せず、夜文学界に寄せるためにエセエ革命とは何か二十八枚脱稟。エセエの政治談にわたるものはこれにて打切とし来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり。

一九五三年に入ると、石川はまた新しい試みに手を染める。四月一日、《雨月物語を読む》これが新釈を出せよと別冊文藝春秋の請あれば也》とあるが、《新釈雨月物語》の連載である。

実は石川は過去に「雨月物語」現代語訳を出版したことがあるのだが（『現代訳日本古典 秋成・綾足集』小学館、一九四二）、鈴木貞美が《全くの新訳と考えるべきである》（「解題」『石川淳全集 第十七巻』筑摩書房、一九九〇、五七二頁）と述べる通り、訳文は全く異なっており、新しい試みであることは動かない。「吉備津の釜」から「蛇性の姪」までの九篇が隔月刊の「別冊文藝春秋」第三十三号（一九五三・四・二八）から第四十一号（一九五四・八・二八）までに掲載された。

「群像」一九五三年三月号に「鷹」が掲載される。「鳴神」（「新潮」一九五四・三）などとともに《革命小説》と括られることもあるこの作品は石川淳の代表作の一つと言い得る作品であるが、日記か

ら着想から完成までの経緯を窺うことができる。

前号に翻刻された箇所であるが、一九五〇年七月十六日、《邦訳エーリヒ・ケストナー「エミールと軽わざ師」新潮社子ども本を読む、さしたることも無き本ながらこの筆法をもつてコミニスト少年物語を書かばおもしろかるべしとおもふ》とある。石川が手にしたのは高橋健二訳『エミールと軽わざ師』（新潮社、一九五〇・六・三〇）だが、もちろんこのケストナー作品自体はコミニスト少年の物語ではない。

このアイディアが実現したと仮定して石川淳作品史をたどってみると「鷹」「鳴神」がそれに相当すると考えられる。最初の着想から三年ないし四年近くもかかることになるが、一定のヴォリュームのある中篇小説に結実するまでにそれなりに時間を要したということだろう。『エミールと軽わざ師』の子どもたちが、問題解決のために力を合わせる中、大人の思惑を知り、世の中の仕組みを学びながら対処法を編み出して行ったように、「鷹」の国助は失業を大きなきつかけとして、「鳴神」の柿夫は軍需転換を目の当たりにして、体制の実態を学び、世の中の仕組みの把握が進むとともに自分の果すべき役割に目覚め、同志たちと連帯して行く。《この筆法》として括られるべき共通点はこのあたりだろう。

「鷹」について、その後の経過は、一九五二年十一月一日、二十四日、一九五三年一月二日、七日、十四日の記述にたどれるが、二回に分けて「群像」担当者に原稿を渡し、特に後半部分に難渋

したことが分かる。名作の誕生は難産だったのである。

表題作として収録する『鷹』（講談社、一九五三・七）が、二刷り（千五百部）、三刷り（二千部）と増刷りを重ねたことが、同年八月二十五日、十一月九日の記述から分かる。

海外の児童文学から着想を得た中篇小説の執筆は、おそらく児童文学翻案作品の執筆というそれ自体新しい試みとも関係し合いながら、こちらもまたこの時期の新しい試みと数えられよう。反響も上々であった。

単行本『夷齋筆談』（新潮社、一九五二・四）についても触れておこう。初出の連載の成立までの紆余曲折には前号で触れた通りだが、一九五二年五月二日、《夷齋筆談二部届けらる、この本は発売とともに板元にては売切のよし》という記述が目を引く。限定一千部、和本仕立ての高価な書籍で、石川の造本へのこだわりを押し出した印象が強かったが、しっかり売れたわけで、版元サイドとしても手応えを感じたようだ。さればこそ、文藝春秋新社の出す「文学界」連載であったにもかかわらず、『夷齋清言』は新潮社が出版を申し出、こちらもやはり限定版和本仕立てで上梓されることになるのである。

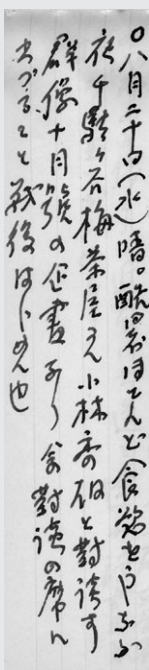
一九五二年に入っの『夷齋筆談』関係の記述は、一月三十日、二月一日、十九日、二十七日、三月七日、十五日、十八日、二十二日、四月三十日、五月二日、十六日、六月十日にある。

そして次に単行本『夷齋清言』（新潮社、一九五四・四）である。

初出の連載が《来月よりはまた新たなスタイルを発見するつもりなり》との宣言とともに始まったことは既に見た。一九五三年七月十日、《新潮社新田敏より電話にて夷齋清言を限定板にて上梓すべきよしを告げ来る》とあり、先ほど触れたように単行本化を新潮社が引き受けることになる。九月二十五日、《夜帰宅せるに京都の紙屋（岡忠）来る 夷齋清言の用紙の件也》とあり、使用する紙を念入りに選定していることが分かる。他に、七月十四日、一九五四年一月六日、二月五日、十七日、十八日、二十五日に言及がある。

ここで、この時期の石川の「初めて」エピソードを二つ拾っておこう。

一九五二年八月二十日、《夜千駄ヶ谷梅茶屋にて小林秀雄と対談す 群像十月号の企画なり 余対談の席に出づること戦後はじめて也》とある。「現代文学の諸問題」と題して「群像」十月号に掲載される。



もう一つ、一九五二年七月二十五日、《夜NCBの迎へに依りてその社の録音室におもむきはじめて放送をぶつ、講演といふこともまた初めて也、漫然たる随想を語る。》ラジオ放送への出演である。

る。ラジオ出演への言及は、他に、同年七月二十四日、九月二十六日、二十八日、十月七日、十月十二日、十四日、十九日、一九五四年二月十一日、十六日にある。

## （二）他作家らとの交流

次に、同業者である作家・文筆家との交流も見ておこう。日記本文にはさまざまな名前が出て来て楽しめるが、紙幅の都合もあり、数名に絞ることにする。

### 永井荷風

一九五二年十二月二十二日、《マンハッタンにてはじめて永井荷風に逢ふ》とある。「断腸亭日乗」には《十二月廿二日。晴。午後中央公論社。夜銀座マンハッタン》（『荷風全集 第二十六卷』岩波書店、一九九五、一二六頁）とある。石川は同年四月からこの店で飲むようになり、荷風はもつと遅く同年十一月中旬から飲むようになったようで、いずれ顔を合わせる成り行きだったわけだが、この時、荷風は七十三歳、石川は五十三歳。その文業を評価し私淑し続けてきた荷風に初めて対面することとなり、石川はいったいどのような言葉を荷風と交わしたのだろうか。

とを告ぐ。その著飢餓同盟を贈らる。講談社の招きに応じて安部とゝもに池袋の沖縄料理におもむき沖縄をどりを観る。高橋新吉山之口猥に逢ふ》とある通り上梓に至ったわけだが、ゲラ刷への朱入れにどのくらい石川の意見が反映されたのだろうか。

### 山内義雄

次に触れておきたいのが、作家ではないが、石川の東京外国語学校仏語科の先輩に当たり、石川の福岡高校への就職にもあずかった山内義雄（一八九四―一九七三）との再会とそれに続く交流である。

一九五二年三月二十八日、《新宿紀伊国やにPaul Valéry : Souvenirs Poétiques, Stalin, La linguistique et l'impérialisme russe. Par Lucien Laurat.をあがなふ、その書庫の中にてたまたま山内義雄に逢ふ、じつに十数年ぶりなり》。十数年ぶりの再会が、洋書漁りに来た書店の書庫だったとは！

同年六月二日、《白水社泉川某来話 山内義雄訳窄き門の新板を出すにつきその新潮社刊の初板に附したる余の跋を再録せんことを乞ふ おもへば余がこの跋文を撰したるは関東大地震の年の五月に係る、すでに三十年のむかし也 余かかる若年の述作をふたゝび出すことを好まざれども山内との旧誼をおもひこれを承諾す、但原形のまゝにて一字一句をも改めず、山内にはがきを書き句を添へてやる さみだれやふと見つけたる古日記》。七月二十四日、

### 安部公房

石川のサポートなどもあつて芥川賞受賞作家となったあとの今回の時期でも石川と安部公房との交流は依然として続き、それほど衰えない。一九五三年一月十四日、十六日、二月二十一日、二十五日、三月十三日、四月五日、十六日、二十八日、五月六日、二十二日、六月十四日、七月八日、八月十三日、九月九日、十月二十一日、十一月二十日、二十二日、十二月十一日、一九五三年一月五日、二十九日、二月十三日、四月十四日、六月十八日、八月三十日、十月一日、二十六日、一九五四年一月五日、八日、二月六日に、安部公房への言及がある。

これらの中から安部のある作品をめぐる興味深いエピソードを拾っておこう。

一九五二年五月二十二日、《留守中窪田啓作安部公房来れるよし、窪田はその訳著エリユール詩集をまた安部はその書下し原稿を置いて去れり》とあるが、これは「飢餓同盟」の原稿であり、石川のチェックを求めて持ってきたのである。同作への次なる言及は一九五四年一月八日、《安部公房書下し小説飢餓同盟のゲラ刷を読む これ板元講談社より送り来れるもの也 部分おもしろけれども全体いまだしの感あり》というもので、石川の評価もさることながら、ゲラ刷が著者その人ではない石川に送付される手はずになっていた事実が面白い。その日から一ヶ月足らずの二月六日には、《午後安部公房来話 さる四日立春の日に女子誕生したるこ



《午後白水社瀬尾正明来話、山内義雄使として窄き門並にコニヤツク二本届け来る、「略」山内にはがきに句を書きて遣る、めぐり来て二十九年の涼しさよ 註 新板窄き門は初板の時より二十九年目にて初板に寄せたる余が跋文もここに再び剗剗に附されたり》。再会に続いて今度は約三十年ぶりの再刊の話。挨拶の発句も含め、懐旧の情に溢れた記述である。

翌一九五三年一月十六日、《帰来山内義雄より早稲田の大学校に出講せむことをすゝめられたれば教師商売には気乗せざれども旧友の言無にしがたくともかくにもとて履歴書といふものをしてしむ すなはち感あり／ 五十年かく恥も無き寒さかな／ 又／ かく恥のつも利てこゝに五十年あと白雪の消なば消えなむ》

一月二十一日、《山内義雄より来信。早稲田大学教授会にて余の出講を議決したるよし これも浮世の義理なるべし 山内に承諾のはがきを遣る 鳩舌をあやつる芸の日永かな》。

旧友からの依頼を《浮世の義理》と引き受ける石川だが、かつて福岡高校でのフランス語講師を一年足らずで辞め、作家稼業に転じた者として、さまざまな思いが脳裏に去来したことだろう。発句二句、狂歌一首が生み出された。

こうして石川は早稲田大学政経学部で一九五三年四月から一九五五年三月までフランス語非常勤講師を務めることになる。関連記述は、一九五三年一月二十六日、四月六日、二十二日、五月六日、二十日、六月十七日に見出せる。

## 句歌

約三十年ぶりに《教師商売》に就くに当たって《句歌》が生み出されたのを眺めたタイミングで、《句歌》について触れておこう。以下の日にちに石川自作の《句歌》が記されている。

一九五二年

一月一日（発句と狂歌）、二日（「首尾」へ）、六日、十六日、三月十一日、十七日（「歌仙」へ）、二十五日、四月十八日、二十日（山川朝子宛）、五月七日、十一日（加藤周一宛）、十七日、六月二日（山内義雄宛）、五日、十四日、十六日（堀辰雄宛）、七月十五日（小林秀雄宛）、二十四日（山内義雄宛）、十月二十五日（堀口大学宛）、十二月十九日

一九五三年

一月一日（三ツ物）、十日、十六日、二十一日（山内義雄宛）、二十三日（西東三鬼宛）、二月二日（西東三鬼宛）、五月九日、七月九日、十月十二日（久保田万太郎との付け合い）、十五日（京都・芸妓宛）、十九日、二十八日（永井龍男宛）

一九五四年

一月一日（三ツ物）、十七日（永井龍男宛）

公表の予定のないまま備忘のために記した句歌は私的なものだし、礼状などに添える句歌なども、他者との交流の中に置かれる

という意味では半ば公的な面もあるうが、公刊とは言えない。そんな中、注目したいのが、先に「（二）執筆活動」のところで、エッセイの一タイプとして触れた「首尾」「歌仙」という一九五二年の試みである。

「首尾」については、一月二日、六日、十六日の記述を追ってゆけば、正月二日に試みた三句仕立ての《三ツ物》の連句を、「群像」に寄稿すべく十二句からなる《首尾》に膨らませて行つた経緯がたどれ、「歌仙」については、三月十七日、四月九日、四月十八日、五月十七日の記述を追ってゆけば、石田波郷を含む酒席の同席者に三句を贈つたという座興をきっかけに、こちらも「群像」に寄稿すべく《歌仙》三十六句の独吟へと膨らませて行つた経緯がたどれる。

「首尾」も「歌仙」もジャンルのにはエッセイと括られようが、おそらくこれらの試みの延長線上に小説「しぐれ歌仙」執筆という約二年後の挑戦、「群像」一九五五年一月に「第一回」が掲載されたのみで中絶した試みが位置しよう。これらのことについては、未発表の続稿の翻刻も含め小池智子・山口俊雄「石川淳未発表原稿「華嚴」「しぐれ歌仙」続稿・翻刻と解説―世田谷文学館所蔵資料より」（日本女子大学大学院文学研究科紀要）二八、二〇二二・三 <https://jwu.repo.nii.ac.jp/records/3559>）を参照されたい。

他に、亡き太宰治関係として、津島美知子とのやり取りを拾つておくと、一九五二年三月二十八日、《小山清来話、太宰未亡人の

ために書きたる夷齋狂歌箱書をわたし》とあるが、『夷齋狂歌』という公刊物は存在せず、津島美知子のために特製した一点物だろう。一九五三年三月十一日、《小山清来話、津島未亡人よりのことづけにて故太宰治の本二冊（創芸文庫）を贈らる》などからも、両者の関係の継続が窺われる。

## （四）その他

前号翻刻分でも時事への言及は、朝鮮戦争や金閣寺放火事件、レッドパージぐらいとごくわずかであったが、今回翻刻分では、一九五二年五月二日、《昨日のメーデーは一部暴動化せりと伝ふ》といういわゆる血のメーデー事件への言及のみとさらに少ない。

他方、私生活をめぐっては、転居および離婚と、二つの大きな出来事が書き込まれている。

港区芝高輪南町から杉並区清水町の片岡光恵（故片岡鉄兵夫人）宅への転居については、一九五三年一月十七日、《山川朝子来話。荻窪の片岡氏余のために家を借さんといふ、朝子幹旋也》というところから話が始まったことが分かる。同月二十八日、二月五日、八日、十一日の記述を挟んで十二日に転居、十五日、二十八日も関連記述がある（なお、同宅には、安部公房と交流のある勅使河原宏が一九五〇年頃住んでいた）。

もう一つの大きな出来事、離婚については、一九五四年三月



二十五日の記述に明記されている。赤坂区役所とあるのは、旧赤坂区役所庁舎を引き継いだ港区役所赤坂支所のことである。離婚ということがあったことについては、石川自身が「往復書簡 坂口安吾、石川淳」(『新潮』一九五四・一〇)で公表することになるが、日記ということでは、離婚相手の(毛利)米子について、かつて付き合ひのあった伊藤整がその日記の一九五四年十月十三日の記述の中で触れている(『伊藤整日記1 一九五二—一九五四年』平凡社、二〇二二)。

離婚届を出したのと同じ日の記述に、『池田忠雄をその家に訪ひいく子とのことをいふ』とあるのは、その後の再婚相手となる女性の夫に直ちに話を付けに行ったということだろう。再婚相手は、日記では概ね「よし」「A」といった暗号で記されてきた——ただし、一九五二年十一月九日には『池田生子』、一九五三年八月二十四日には『池田活子』と記されている——人物で、一九五四年一月二十七日、二月八日—十日、十七日、二十三日などの記述に関係の深まりが窺える。

以上、許された紙幅の中で、日記を読む際にぜひとも注目しておきたい点について一通り触れてみたつもりである。ご覧の通り石川淳という作家の創作に関わるさまざまな情報が得られる貴重な日記であったが、一九五三年十二月三十一日、『日記を記すに懶くはなはだ怠る』、一九五四年二月五日、『このごろ日記をつけることはなはだ懶し』と、やや尻すぼみ気味となつて行つたのは、実生活上の大きな転機が関わつていて仕方がないとは言え、やはり残念ではある。

しかし、無いものねだりをして嘆く暇があるのであれば、公表された日記から汲み出せるものを汲み出すことにまづいそむべきであろう。石川淳ならびにその作品について、同時代の作家たちとその関係について、同時代の出版事情について、同時代の洋書受容について、同時代の古典籍受容について、同時代の飲食店の事情について……石川淳日記から汲み出せることは実に膨大なのだから。

(日本女子大学教授)